

聖書：ルカの福音書 16章 14～31節

説教：神はご存じです

1 金持ちとラザロのたとえ

新しい年の最初の主の日の朝を迎えておられます。一年の初めにあたり、夢や希望を描く方も多いでしょう。どんな夢を見るでしょうか。貧しくなりたいとか、病気になりたいと思う人はいません。できるなら今よりも暮らしが良くなり、健康に無事に過ごすことができればと願うことでしょう。

しかし、願ってもかなわない方がいます。今日の聖書で言えば、ラザロです。ずっと病気を抱え、路上生活を余儀なくされ、食べ物にも事欠き、貧しいまま亡くなっていきます。それとは対照的に紫の衣を着て、毎日贅沢に遊び暮らしている金持ちがいました。その金持ちもやがて死にます。どちらの人生が幸せと言えるでしょうか。人間最期は平等に死ぬのです。どうせ死ぬのなら、この金持ちのように贅沢に暮らして幸せに暮らしたい。多くの人はそう思うはずですが。

ところがこのたとえ話には続きがあります。金持ちはハデスに落とされ、永遠の炎の中で苦しんでいます。一方ラザロは天に上げられ、神の国に迎えられています。このことについてアブラハムはこう説明しています。25節。「子よ。思い出してみなさい。おまえは生きている間、良い物を受け、ラザロは生きている間、悪い物を受けていました。しかし、今、ここで彼は慰められ、おまえは苦しみもだえているのです。」

いったいなぜこの金持ちはハデスに落とされたのでしょうか。神はどのような生き方を

しなさいと言われているのか。そのことに目を留めていきます。

2 パリサイ人への警告

1) 目に見えないところにあるもの

まずこれは誰に対して語られたたとえであるか。そこから見ていきます。イエスはひとつ前の箇所、「あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません」と語っていました。パリサイ人はこれを聞き、あざ笑います。彼らは、人々に対し旧約聖書を正しく守るように指導していました。たとえばこんなかたちです。安息日には、病人がでてものちにかかわらなければ病気を直してはならない。お腹が空いても畑に行って収穫してはならない。なぜなら聖書に「安息日には労働してはならない」と書かれているからだ。それが彼らの言い分でした。とにかく目に見えるところで、守っているか守っていないかを判断しようとするところに特徴があります。

そんな彼らにイエスは二つの警告をされます。その一つ目は15節にあります。「あなたがたは、人の前で自分を正しいとする者です。しかし神は、あなたがたの心をご存じです。人間の間であがめられるものは、神の前では憎まれ、きらわれます。」

イエスが言われることはパリサイ人と正反対です。あなたがたは目に見える所にこだわっているけれど、それは何の意味もない。神は、あなたがたの心を見ている。目には見

えないけれど、確かにあなたが何を考えているかをご存じである。人前では正しく振る舞っているつもりでも、心の中には何があるか。それをよく見なさいと警告されます。それが一つ目です。

2) 律法の一画が落ちるよりも

二つ目の警告は17節にあります。「しかし律法の一画が落ちるよりも、天地の滅びるほうがやさしいのです。」

これはどんな意味なのかと疑問に思う方もいるでしょう。「律法の一画」を、「旧約聖書に書かれているすべての預言」と言い直してみると理解しやすくなります。旧約聖書の原文は、日本語の漢字と同じように点や画からつくられています。点や画を一個くらい省略してもなんとか意味は通じます。一画が落ちるのはそれくらい簡単なことです。それに比べて天地が滅びるということは大変なことで、人間の力でどうこうできるようなものではない。それが私たちの常識です。ところがイエスが語ることはこれと正反対です。天地を滅ぼすような大きな力をもってしても、律法のことばが変わることは絶対がない。イザヤ書40章8節に「草は枯れ、花はしぼむ。だが、私たちの神のことばは永遠に立つ」とあるとおりです。

パリサイ人はどうだったのでしょうか。あたかも信仰深いように演技しながら、神のことばを勝手に書き換えていました。一画どころか、聖書の文字を書き換え、意味を変えてしまい、それを人々に強制していました。イエスはそのことに対して警告を与えました。それが二つ目です。

3 死人の中から生き返る

1) たとえ話の結論は？

このことを押さえてから、たとえ話に目を留めていきます。ここから皆さんはどんな結論を考えるでしょう。たとえばこうでしょうか。「金持ちにならないで、みなラザロのように貧しく暮らしましょう。」でも本音はどうですか。将来天国に迎えられることがわかっていても、金持ちの門の前に寝かせられ、犬におできをなめられる生活をしたいとはどうしても思えません。

あるいはこんな結論でしょうか。「死んでからは遅い。生きている間に神を信じて救われなさい。でなければ、永遠に地獄の火であぶられ、苦しむことになる。」そんな結論でしょうか。でも本音はどうですか。これではどこかの宗教と同じではないですか。脅迫されて信じるなどまっぴらごめんと言いたくなる。

2) たとい死人が生き返っても

ここに登場する金持ちとはだれのことがか。前後の関係を見ると予想がつきます。イエスのことばを聞いてあざわらっていたパリサイ人たちです。金持ちの家の前にはラザロが寝かせられていました。金持ちが家の門を出入りするたびにラザロのことは目に入ったはずですが、犬だけは、ラザロをかわいそうに思い、できものをなめてくれましたが、金持ちはなにもしようとはしません。関心がないのです。金持ちが見ている世界には、ラザロの姿が一切見えないのです。

金持ちは死んでハデスという所に落とされます。目を上げるとアブラハムが見えました。そのかわたわらにラザロがいるのを見つめます。生きている間は見えなかったのに、いまは見えるのです。でも手遅れでした。い

ろいろアブラハムに頼んでみても、願いはかないません。ならば、せめて五人の兄弟にこんなひどい目にあわないよう、ラザロを送って知らせてもらいたいと願います。なぜそう思ったのか。「もし、だれかが死んだ者の中から彼らのところに行ってやったら、彼らは悔い改めるに違いありません。」ラザロは死んで、天国で慰めを受けています。そのラザロよみがえり、兄弟たちがそれを見たら、神の力を目のあたりにして信じてくれるだろう。そのように考えたのです。

でも、アブラハムの答えは素っ気ないものでした。「もしモーセと預言者との教えに耳を傾けないのなら、たといだれかが死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしない。」

このたとえ話の鍵はここにあります。パリサイ人は、モーセと預言者との教え、つまり聖書を信じている振りをしていながら、実は耳を傾けていません。そんなパリサイ人たちは、実はこの後で死人からよみがえられた方に出会うことになります。正確に言えば、死んだイエスが墓からよみがえったという知らせをローマ兵から聞かされたのです。それを聞いて彼らは何をしたか。信じましたか。いいえ。墓の番をしていたローマ兵に金を渡し、「夜、弟子たちがやって来て、イエスを盗んで行った」と言わせました。「たといだれかが死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしない。」イエスが語ったとおりとなりました。

3) 何を見るのか

この金持ちは、聖書から教えられていたにもかかわらず、生きていた間、ラザロを見ようとはしませんでした。その結果、ハデスに

落とされ永遠の苦しみを味わうこととなります。

ここから教えられることは複雑そうに見えますが、良く考えると非常に単純です。「あなたは何を見ているのか。人の中であがめられるものを見ようとしているのか。それともラザロか。犬におできをなめてもらっているラザロ。あなたは彼を見ているだろうか。」彼はどこにいますか。どこか遠くにいますか。ほかの誰かではありません。あのラザロは自分そのものです。

でも自分がラザロであると認めたくありません。恥ずかしいのです。ほかの人にはもちろん、神にさえ知られたくありません。できれば隠しておきたい暗闇です。でも、隠しようがありません。「神は、あなたがたの心をご存じです」とあります。ということは、隠しても無駄ということになる。無駄なことはやめましょう。神が見ておられるのですから、自分も目を留めていくことになります。もちろん簡単なことではありません。ラザロを見ることはつらいはずですが、恐ろしいかもしれません。でも実はラザロのなかにイエスの姿があります。イエスにお会いしたいとみな言います。どこにおられるのでしょうか。あなたの中のラザロ。そこにイエスがおられます。「神はご存じです」と言うとき、ただ知っていますと言っているわけではありません。ラザロと同じ姿をとられるほどに知っておられるのです。

すでに主が私たちの心を知ってくださっています。そのことに力をいただきながら、イエスに目を留めて歩んでいきます。